

## Book Review 16-16 人物 #陸奥宗光

『#陥穽 陸奥宗光の青春』（辻原登著）を読んでみた。著者は1945年和歌山生まれ。生まれ育った和歌山県の面影もモチーフとした、中編小説『村の名前』で第103回芥川賞を受賞。

陸奥宗光といえば、外交のプロであり、戦争終結後の交渉で活躍した人物として認識していた。しかしながら、本書を読むと別の面があったことを知ることができる。また、幕末から明治維新にかけての激動時代の中で様々な人物の動きが手に取るようにわかるようになる。このイメージのままだと、本書の「陥穽」というタイトルに違和感がある。なぜなのか。結論を先に述べてしまうと、明治政府転覆計画に関わり、数年の牢獄生活を送っているからである。

話は陸奥の幼年時代から始まる。紀州藩で重用された陸奥の父が失脚し、和歌山を所払いとなる。貧困の中で高野山の学僧から身を起こそうとする。そして尊皇攘夷の嵐の中、漢学から鞍替えして洋学を志す。様々な縁で勝海舟の海軍塾に学び、坂本龍馬の海援隊へ入隊する。このような活動を通じてこのころに活躍した維新の重要人物と巡り合う。薩長連合を実現させた龍馬の許で、桂小五郎、後藤象二郎らにも接近する。伊藤博文やアーネスト・サトウらとの交流も描かれる。

しかし維新後、陸奥は新政府内で苦境に立つ。時代の流れは、龍馬が構想した世界とは違う方向に進んでいく。薩摩で西郷隆盛が蜂起し（西南戦争）、これを千載一遇の好機と捉えた陸奥は、明治政府転覆計画にのめり込んでゆく。

私が歴史の授業で知った陸奥宗光は服役後の姿であったのだ。人を知ることとは、生まれてから死ぬまでを知ることなのだ痛感した。

陸奥宗光は、1844年和歌山生まれ。紀州藩士の伊達宗広の六男として生まれる。宗広は紀州藩に仕えながら、国学者・歴史家としても知られ、史論『大勢三転考』を著した。宗光が8歳のとき失脚し、一家には困苦と窮乏の生活が訪れた。和歌山城下を追われ、高野山の荘官の世話になる。

1858年、高野山江戸在番所の寺男として江戸に出る。この頃、桂小五郎・板垣退助・伊藤博文などの志士と交友を持つようになる。その後に勝海舟の海軍塾に入り、塾頭の坂本龍馬に私淑し、亀山社中に加わる。また、長崎亀山に滞在中、一外国人宣教師の家に住み込み、その夫人から英語を教授された。1867年には海援隊に加わり意見書「商方之愚案」を提出、坂本に認められ、商事部門

を任せ外国商人からの武器買付などを行う。竜馬暗殺の黒幕を紀州藩士主張し、海援隊の同志 15 人と共に彼の滞在する天満屋を襲撃する事件を起こした（天満屋事件）。

1868 年、アーネスト・サトウを訪ね、新政府の承認問題について意見交換を行った。陸奥は王政復古の布告を宣言することを提案、サトウの賛成を得ると、これに基づく意見書を議定岩倉具視に提出し、岩倉の推挙により、外国事務局御用掛に任命される。甲鉄艦の引き渡し交渉に成功、その際、未払金十万両を陸奥は大阪の商人らに交渉し、一晩で借り受けることに成功、新政府の首脳陣に深い感銘を与える。6 月大阪府権判事となる。兵庫県知事であった伊藤博文を度々訪ね版籍奉還、廃藩置県などを論じ、親密な関係を結ぶ。1870 年 9 月和歌山藩欧州執事として渡欧し、プロイセンから軍事教官数名を招聘する契約を交わす。その後、薩長藩閥政府の現状に不満を抱き、木戸孝允への接近を通して、薩長勢力の一角に楔を打ち込もうとする。1873 年 10 月の征韓論争を経て大久保利通体制が確立した。自身は大蔵少輔でしかなく、陸奥は 1874 年 1 月、藩閥勢力による政権の独占を批判した「日本人」を木戸に呈し、官を辞した。この間、芸妓であった蓮子夫人と結婚、長男広吉、次男潤吉を儲けるが、蓮子夫人が亡くなり、亮子と再婚した。

1877 年、陸奥は和歌山からの募兵を募ることを献策、岩倉から依頼され大阪に向かう。これは増援部隊の派遣で戦後の陸奥の発言権強化と、状況によっては土佐立志社の反乱軍と合流する両にらみの戦略であった。立志社は武力蜂起と暗殺による政府転覆を謀っており、陸奥は土佐派と連絡を取り合っていた。しかし大久保らは陸奥に和歌山募兵を担当させることの危険を察知し、政府による募兵計画を進行させていた。これを伊藤から聞かされ、自らの秘策が封じられたことを知り深い屈辱感と怒りにまみれた陸奥は仲間と共に即時挙兵と暗殺計画を画策する。しかし、立志社の挙兵計画が遅滞したため、計画に見切りを付け、東京で仲間に計画の中止を説く。その後陸奥は検挙され、除族のうえ禁錮 5 年の刑を受け山縣監獄に投獄された。その後、伊藤博文の尽力により当時最も施設の整っていた宮城監獄に移された。1883 年 1 月、特赦によって出獄を許され、伊藤博文の勧めもあって欧州に留学。内閣制度の仕組みや議会の運営方法等について、英国の知識と知恵の数々を盛んに吸収し、ウィーンで国家学を学んだ。

1886 年 2 月に帰国し、10 月には外務省に出仕。メキシコとの間に日本最初の平等条約を締結することに成功する。1890 年、衆議院議員に初当選。その後、第 2 次伊藤内閣に迎えられ外務大臣に就任し、英国との間に締結した不平等条約である領事裁判権の撤廃に成功する。以後、欧米列強とも同様に条

約を改正した。陸奥が外務大臣時代に、不平等条約を結んでいた15ヶ国すべてとの間で条約改正（領事裁判権の撤廃）を成し遂げた。日清戦争の戦勝後は伊藤博文とともに全権として下関条約を調印し、戦争を日本にとって有利な条件で終結させた。三国干渉が到来したとき、療養生活に入っていた陸奥は肺結核で病床についていた。1897年、肺結核で死去。享年54。